

1997

月 シンポジウム

「中高生のデジタルな友達づくり」
CRN 第 1 回子ども学シンポジウム
として開催。当時から中高生の間で、ポ
ケベル・携帯電話そしてプリクラとい
ったメディアが友達づくりに不可
欠なツールでした。今後のネット
ワーク社会を展望し、子どもたち
の未来と人間関係について考えまし
た。

出演者：

- あわやのぶこ（異文化ジャーナリスト）
- 香山リカ（精神科医）
- 河村智洋（慶應義塾大学大学院石井研究室）
- 竹村真一（東北芸術工科大学助教授）
- 藤田英典（東京大学教授）



1996

7月 CRN ウェブサイトオープン
時代はホームページ創生期。
試行錯誤でつくりあげた初代
CRN サイトです。



7月 シンポジウム
「マルチメディア社会の子どもたち」
1996年7月26日、チャイルド・リ
サーチ・ネット（CRN）は開設記念
シンポジウムを開催。「マルチメディ
ア社会の子どもたち」と題し、シン
ポジウム会場と学校の教室とをテレ
ビ会議で結び、多地点討論会を実現。

出演者：

- 石井威望（慶應義塾大学教授）
- 稲増龍夫（法政大学教授）
- 内田伸子（お茶の水女子大学教授）
- 久保田競（日本福祉大学教授）
- 坂本昂（放送教育開発センター所長）



CRN 1996 ~ 2002
10年の足跡
CRNの誕生～成長期

1996年の設立以来、CRNが歩んできた
10年の歴史を振り返ってみました。最
初の6年間はイベントやシンポジウムな
どを通して、子ども学の認知普及活動に
取り組んできました。その結果、国内外
の研究者たちとの間に信頼関係が築か
れ、後に「日本子ども学会」や中国の研
究者たちから研究活動への協力を要請さ
れるまでに発展しました。

注：出演者は50音順。
また、肩書きは当時のものです。

1998

11月 講演会

「チンパンジーと自然のお話」

CRN企画での2回目の講演。小学校6年生の子ども達にむけて、38年間にわたるチンパンジーとの研究生活について話していただきました。

出演者：

- ジェーン・グドール博士
(ゴンベ野生生物研究所所長)



12月 CRNウェブサイト ウェブデザインアワード銀賞受賞



1月 国際シンポジウム

「メディアは子どもをどう育てるのか？」
「変わりつつある子ども期 メディアは子どもをどう育てるのか？」をテーマに、世界8ヶ国の代表が、マルチメディア社会に生きる人々にとって必要な知恵と今後の指針について意見を交換しました。

出演者：

- アヌラ・グーナセケラ (アジアメディア情報コミュニケーションセンター研究責任者)
- 石井威望 (慶應義塾大学教授)
- イディット・ハレル (ママメディア代表)
- 如月小春 (故人・劇作家)
- セイモア・バパート (MITメディア・ラボ教授)
- 廣瀬通孝 (東京大学助教授)
- 三宅なほみ (中京大学教授)
- 山根一真 (ノンフィクション作家)

ほか

10月 講演会

「チンパンジーの世界と自然のお話」

世界的な霊長類研究者ジェーン・グドール博士をお招きし、子どもたちに向けて講演会を開催。子どもたちが真剣に博士のお話を聞き、会場から活発な質問が出たのが印象的でした。

出演者：

- ジェーン・グドール博士
(ゴンベ野生生物研究所所長)



10月 講演会

「子どもの発達と家族研究」

「保育の質とは、子どもがいかに思いやりのある、かつ個々に注意を払われているかによる。日常的に母親以外の保育に頼っている親は、保育の質の高さを求めるべきである」と共働きの親にメッセージを送りました。

出演者：

- ジェイ・ベルスキー博士
(ペンシルバニア州立大学教授)

1999



8月 公開座談会

「学級崩壊はしついでくいとめられるのか？」

「学級崩壊」という言葉が世間一般に広がるなかで、その原因を家庭や学校のしつけにだけ求めるのではなく、教育モデルの不在や形骸化にこそ求めるべきではないかという視点から話し合いが行われました。

出演者：

- 荒木肇（生涯学習センター常任理事・川崎市立京町小学校教諭）
- 尾木直樹（臨床教育研究所「虹」所長）
- 木下真（編集者・司会）
- 広田照幸（東京大学大学院助教授）
- 宮台真司（東京都立大学助教授）



PLAYFUL

11月 プレイフル

「playful」の「play」は、単に「あそび」「楽しみ」だけでなく、「運動」さらには「ひらめき」の意味もある。「playful」は、「あそぶ喜び一杯」の状態で、「あそび」によって、子どもが生きる喜び一杯「joie de vivre」になることを考えている。（by 小林登）

「CRN国際プレイショップ99」

小学校5・6年生を中心とする児童とその保護者、教師約150名が参加。「つくってーかたってーふりかえる」という活動を、大人と子どもが五感を使って、夢中になって行い、みんなで同じ空気を共有しました。

出演者：

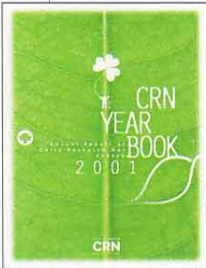
- 上田信行（甲南女子大学教授）
- エディス・アッカーマン（MITマサチューセッツ工科大学客員教授）
- 大森美弥（小児心理カウンセラー）
- ジョギ・パンガール（デザインコンサルタント）
- ヒレル・ワイントラウブ（同志社国際中学・高等学校コミュニケーション部主任）
- ミルトン・チェン（ジョージルーカス教育財団エグゼクティブディレクター）
- 宮田義郎（中京大学教授）
- リアン・ラムゼイ（同志社国際中学・高等学校教諭）
- ルース・コックス（女優、教育者）

ほか

2001

3月 「CRN YEAR BOOK」創刊

CRNの年次活動報告書が創刊。脳科学、人類学、経済学など多様なジャンルの専門家とCRN小林所長が子どもについて語る巻頭対談は、創刊以来の人気コーナーです。



2001 最新の脳科学は、
子ども観をどう変えるのか？
澤口俊之（北海道大学教授）

2002 子どもは「心と体」で遊ぶ
麻生武（奈良女子大学教授）、斎藤孝（明治大学助教授）

2003 未来のアトムは子どもを超えるのか？
田近伸和（フリージャーナリスト・作家）

2004 シナプスの微量物質が
心と体のバランスを支配する
持田澄子（東京医科大学教授）

2005 脳の巨大化とともに長期化した子ども期
馬場悠男（国立科学博物館人類研究部部長）

2006 子どもを粗末にしない国にしよう
～社会的共通資本の視点～
宇沢弘文（経済学者）

7月 プレイショップ

「Feel the Media」 in 吉野

幼児～高校とその保護者を対象に、「メディア」を感じ、家族で楽しむことができるプレイフルな空間をつくりました。

PLAYSHOP at ワールドユース ミーティング2000 in 名古屋



2000

1月 公開座談会

「『学校』と『家庭』を結ぶもの」

テーマ論考「働く母親の子育て支援」の関連企画。「子どもはどこで社会性やルールを身につけるのか？」と題して、学校・家庭・地域の連携、「学校」の役割を再構築する、などの意見交換をしました。

出演者：

- 木下真（編集者・司会）
- 藤田英典（東京大学教授）
- 牧野カツコ（お茶の水女子大学教授）
- 渡辺秀樹（慶應義塾大学教授）



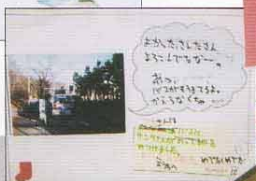
7月 国際シンポジウム

「21世紀の子育てを考える」

米国NICHDの行った「子育てのあり方、とくに早期保育は子どもの体の成長や心の発達にどのように影響するか？」の研究をもとに、子育てのあり方や早期保育について活発な議論が展開されました。

出演者：

- 今井和子（東京成徳短期大学教授）
- 内田伸子（お茶の水女子大学教授）
- サラ・フリードマン（米国NICHD研究員）
- 高木友子（郡山女子大学講師）
- 牧田栄子（育児ライター）
- 松本寿通（福岡市医師会乳幼児保健委員会委員長）



プレイショップ

①プログラム内容、②人との関わり、
③道具（メディア）、④ハード環境、
の4つの観点から子どもがプレイフル
になるための要素を研究するために、
さまざまなテーマでワークショップを
設計し、実施し、考察を行いました。



4月 「ながやまチーきち」開設

プレイフル研究を発展させ、東京郊外
の廃校の一室に、「新しい学びと遊び
の実験場・ながやまチーきち」を開
設。定期的なプレイショップの開催と
小学校低学年を対象にした遊び場を提
供し、研究を進めました。



- 3月 ・「雪が届けるメッセージ」
- 6月 ・「プレイフルマジック1～生き物つながり～」
- 7月 ・「プレイフルマジック2～星に願いを～」
- 8月 ・「プレイフルマジック3～セミの冒険～」
- 12月 ・「ふゆものがたり～プレイフルストーリーをつくろう～」



2003～

2002

11月 プレイショッ

「カラフル王国であそぼう」

「カラフル王国」という架空の舞台の中で、子どもたち自身が「住人」になり「王国」を「建設する」という設定。身にまとうもの（服や帽子やお面）にいろいろな材料でつくった好きな色を塗り、好きな装飾を施すなど、多方面から子どもの想像力を刺激するアプローチを試みました。

1月

CRN実践保育研修会

「保育の質を考える — 心とからだを育む視点から」

保育に関する講義のほか、脳を育む「運動保育援助プログラム」の実技講習も交え、子どもの心とからだを育てる実践的な研修を行いました。

出演者：

- 磯部頼子（前・全国公立幼稚園長会会長）
- 柳澤秋孝（松本短期大学教授）



3月

プレイショッ

「チーきち子どもスタジオ

— 映画をつくろう!」



2003年～ 新たな活動のステージへ —「子ども学」研究と中国—

CRNは設立当初からさまざまな活動に取り組み、学問の領域や職業の違いを超えて、子どもに関心をもつ人々との信頼関係を大切にしてきました。アクセス数や知名度を上げることが目的とした実験的な段階を終えて、子どもに関する情報拠点として安定した役割を果たすと同時に、新たな領域への扉を開きつつあります。

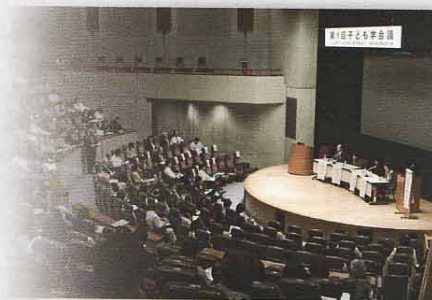
CRNの活動のキーコンセプトは子ども学。20世紀後半からのヒューマン・サイエンスの急激な進展により生まれた、子どもの謎を解明するための創造的な学問です。現在、CRNは子ども学の裾野を世界に広げていくために、中国語による子ども学の発信を開始し、東アジア圏の国々との

ネットワークづくりに着手しています。（詳しくはP14～17をご覧ください）





CRNの子ども研究支援



「子ども学」の広がり
ウェブサイトを核とする研究所であるCRNは、そのメリットを最大限に活かして、研究支援のネットワークを広げる活動を進めています。

CRN子ども学研究会から 日本子ども学会へ

日本子ども学会の前身である「CRN子ども学研究会」*1がスタートしたのは、2002年春のことでした。子育てや教育に関する理論研究や実践研究、最新のヒューマン・サイエンスに基づく子ども研究の報告など、幅広くテーマを設定した上で、メンバーが話題提供のためのレクチャーを定期的に行いました。研究会の成果は、子どもたちと科学をめぐって語り合う「子どもサイエンス・トーク」の実施や研究会の内容をまとめた『子ども学研究会Report2002』の発刊へとつながっていきました。

やがて研究活動の広がりとともに、より多くの専門家を集めて、学際的な子ども研究を進展させるための「日本子ども学会」の構想が生まれました。翌2003年11月には、研究会が設立準備会を兼ねる形で設立総会を開催。2004年の4月からは学会員の募集を始め、その後は毎年の学術集会の実施と、学会誌『チャイルド・サイエンス』の発行を中心とした活動を続けています。

CRNと日本子ども学会はそれぞれ独立した組織ではありますが、どちらも小林所長の子ども学の考え方をベースにしており、誕生の時点から協力関係にあります。例えば、CRN主催の「チャイルド・サイエンス懸賞エッセイ」は、子ども学の啓発を促進する重要な活動のひとつとなっていますが、毎年多くの作品の応募があり、優秀作品の授賞式は日本子ども学会の学術集会の場で行われています。





「子ども学」を学ぶ人たちの ネットワークづくり

「子ども」や「子ども学」を冠する学部、学科、専攻が全国の大学・短期大学で増えていることをご存知でしょうか。2002年度に3大学に初めて設置され、ここ数年は毎年10校以上の学校に子どもに関する専門学部等が生まれています。

CRNでは2006年度に38大学25短大を対象に、「子ども」を冠する学部学科の現状を調査し、第3回子ども学会議にて発表を行いました。子どもの問題が複雑化、深刻化する中で、既存の学問の枠を超えた知識を子どもの専門家に求める社会的な要請が、その背景にありました。一方で、「子ども学」という学問分野や子どもを対象とした学際手法が確立されておらず、教育内容に不安を抱える現場の声も聞こえてきました。

CRNでは、そのような時代の要請に応えようとする高等教育機関とも連携して、子ども学のネットワークを広げていきたいと考えています。2006年4月には「日本子ども学会」と協力し、子ども関係の学部や学科が多い関西地区で「関西子ども学大学関係者の集い」を企画。関係する大学・短期大学に「子ども学」研究情報を届けたりするなど、「子ども学」を教え、学ぶ人のネットワークづくりに取り組むなど、多方面からのサポートを行っています。

*1 メンバーは、小林登氏、佐倉統氏、安藤寿康氏、宮下孝広氏、神原洋一氏、牛島廣治氏、木下真氏。

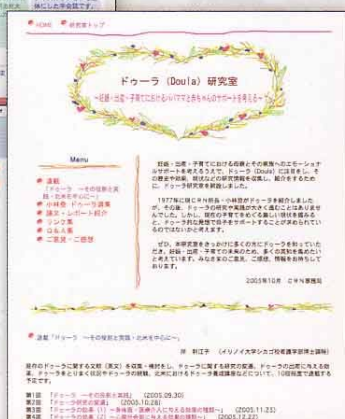
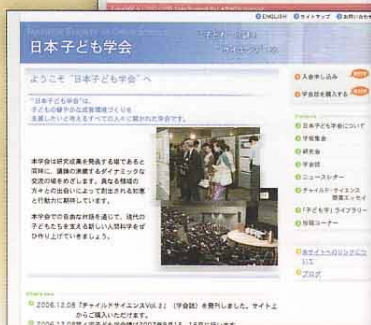
*2 Doula。妊娠、出産、育児を援助する女性のこと。

ウェブサイトを活用した 子ども研究支援

21世紀になって誰もが気軽にウェブサイトをもてる時代になりましたが、サイトの開設や運営には人手と手間がかかります。そこで、CRNでは関係のある、日本小児総合医療施設協議会（JaCHRI）、日本赤ちゃん学会、日本子ども学会、国際子ども学研究センターの公式サイトを運営をお手伝いしています。CRNのもつサイト運営の基盤とノウハウを使って、これらの団体の普及活動に大きく貢献しています。

また、研究成果を一般の方に知っていただく方法の一つとして講演会やシンポジウムの開催がありますが、CRNを利用する研究者のPR活動のお手伝いもしています。CRNには約7000人の子ども関係者が登録するメンバーズ制度があり、サイトにも毎日多くの方がアクセスしています。CRNのイベント情報ページやメルマガにお知らせを掲載することで、より幅広くより迅速に開催情報をお伝えすることができるのです。

さらにCRNでは将来を担う若手研究者の活動も支援しています。大学院で学ぶ学生たちの中には、既存の学問の枠内に収まらない新たなテーマに挑戦する人もいて、研究発表できる場所は決して多くありません。CRNでは興味深い研究に取り組む若手研究者を応援するために、サイト上に発表の場を設けています。これまでに「ドゥーラ」*2「ディスレクシア（難読症）」「ソーシャルスキルトレーニング」「学習環境デザイン」などの研究を支援しました。このサイトが同じような研究に携わる人同士の出会いの場となり、また新たな研究課題の発見の場ともなっています。



国境を超えての活動

中国語版開設後の“児童科学”



2005年2月（旧正月）にCRN中国語版をオープン。
ウェブサイトを通しての日中交流とともに、両国の
子ども研究学者の人的交流も進んでいます。

日中「子ども学」研究者の交流

ウェブは情報交換する上で格好の手段ではありませんが、顔の見えるオフラインの人的交流も欠かせないものと考え、CRNはサイトの運営と同時に、日中の学者の相互訪問による学術交流を進めてきました。

2004年のCRN中国語版の準備期～2006年まで、小林所長が中国で4回の訪問講演をし、中国の子どもの現状をふまえた上で、中国の専門家とさまざまな意見交換を行いました。また、中国から専門家を日本へ招聘し、日中子ども学研究者との交流の場を設けるなどの活動も行いました。



情報の窓口としてのウェブサイト

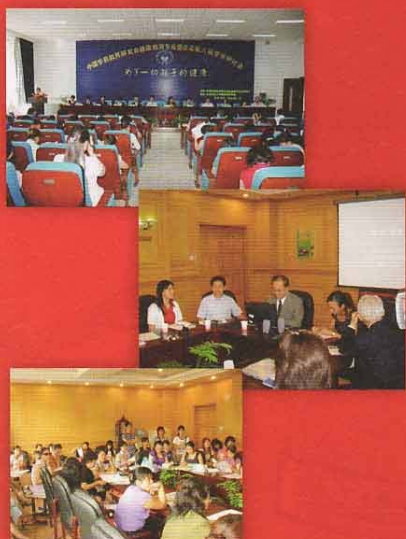
CRN中国語版には、「子ども学」（中国語名は「児童科学」）を紹介する日本発の情報に加え、中国の幼児教育の専門家からの原稿も多く掲載されています。一人っ子の我が子によりよい教育を受けさせたいと考える、中国の子育て熱心な親たちにとって、科学的な根拠に基づく育児理念とノウハウは大変魅力的です。日中両国の学者の知見を集め、そのニーズに応える存在であるCRNは、子どもの親のみならず研究者や教育関係者からも支持を受け、アクセス数を伸ばしています。

日中「一衣帯水」、それぞれの国の事情がありながら、子ども問題でも共通する部分がたくさんあります。コンテンツをさらに充実させ、専門家・親・教育現場を結ぶ役割を果たすとともに、日中の子ども研究を知るための窓口としても機能するよう、CRN中国語版を発展させていきます。

● CRN 主催の分科会

2006年8月、中国吉林省長春にて「中国学前教育研究会 健康教育専門委員会第6回学術会議」が開催されました。この会議の中で、小林所長が基調講演を行い、午後には、CRN主催の分科会が実施され、お茶の水女子大学教授の榊原洋一先生が食育の重要性について発表しました。

子どもの肥満が問題になっている中国では、「食育」への関心が高まっており、医学的な立場からの子どもの教育への提言ということで中国の専門家にも多くの示唆を与えたようです。



● CRN 所長訪中講演

● 宋慶齡基金会主催の 国際フォーラムにて

中国福利会宋慶齡基金会の招聘により、2005年10月に上海で開催された国際フォーラム「多文化共生を背景とした幼児教育」にて、小林登CRN所長の基調講演が行われました。テーマは「Joie de Vivre ～子ども達にとって『生きる喜び一杯』はいつでもどこでも必須のもの～ 情動の子ども学」。子どもを生物学的な視点から捉え、教育と有機的に結びつける「子ども学」に参加者は大変な刺激を受けたようです。



● 人口計画生育委員会の 国際シンポジウムでの講演

2006年10月、秋晴れの好天気に恵まれた上海で、都市人口政策を管轄する人口計画生育委員会主催の「乳幼児の教育と早期発達」国際シンポジウムが開催されました。小林所長は主賓として招かれ、「生体リズムと乳幼児の成長・発達」をテーマに、生物学的な側面から、睡眠リズム・生体リズムと乳幼児の成長発達との係わりについて講演しました。



● 中国子ども研究者の日本訪問

2005年9月、日本子ども学会「第2回子ども学会議」が開催されました。それに合わせ、中国より2名の学者を招聘し、日本で「子ども学」に関心を持つ研究者との交流を企画しました。来日されたのは、朱家雄教授（華東師範大学）と田輝研究員（中央教育科学研究所）。会議中には、「中国における就学前のケアと教育の発展と現状」についてご講演いただき、多くの参加者が中国の幼児教育について知る貴重なチャンスとなりました。

会議終了後の歓迎レセプションでは、発達心理、脳神経科学、ロボット工学、認知科学などさまざまな分野の専門家が、自身の研究と子どもへの関心事を語るなど、活発なディスカッションがなされました。



日本で生まれた「子ども学」は、たくさんの研究者・賛同者の方たちの協力を得ながら、隣国の中国そして東アジアへと旅立とうとしています。どの国でも子どもに関する多くの問題が存在していますが、CRNは、国境を超えてさまざまな分野の専門家が語り合うためのネットワークの中核となることを願って、今後の活動を進めていきたいと考えています。

